

韓国内における日本史研究の概況

－前近代史を中心に－

丁 珍娥

1. 韓国内における日本史学界の歩み

韓国では1965年11月〈東洋史学会〉の設立をきっかけとして、「東洋史」が一つの独立した学問の領域として定着した。ただしこの時の「東洋史」とは主に中国史と認識されており、実質的に日本史はこの範疇外存在であった。1970年代までに発表された日本史論文は、本数もわずかで、論文の中心テーマも韓日関係に偏っていた。

1984年度を前後にして、一部の大学の史学科に日本史を専門とする教授が赴任するようになり、これによって学部と大学院に日本史の科目が開設された。また、その弟子たちが留学の道を歩んで、日本で学位をとって帰国したのが1990年度の初めごろであった。これをうけて日本史は本格的に独自の領域の基盤作りが行われた。まず、1992年に〈韓日関係史研究会〉が、1994年には〈日本歴史研究会（現在、日本史学会）〉が発足した。韓日関係史研究会は、韓国と日本の歴史研究を通じて両国の正しい関係を構築していくことを目標としている。また日本史学会は、留学から帰ってきた研究者たちが中心となり、日本に対する正確な理解を得るために、日韓の研究者相互の共同研究と情報交換を通して、体系的な日本史研究に努めることを目指している。

この二つの学会は、研究論文の発表の場でもあり、日本史に関する様々な意見交換の場としての役割を果たしている。現在は、この二つの学会が日本史関連学会の2本の柱と言えると思う。

2. 日本史関連の主な雑誌

◆学術掲載誌：

外国の著名な学術誌であるSCIのように、国内の学術誌の中で厳格な審査を経て学術振興財団（学振）から認められた雑誌

日本学研究（檀国大）、東アジア古代学（東アジア古代学会）、日本文化研究（東アジア日本学会）、東洋史学研究（東洋史学会）、日本文化学報（韓国日本文化学会）日本学報（韓国日本学会）、韓日関係史研究（韓日関係史学会）、日本研究論叢（現代日本学会）

◆学術掲載候補誌：

東北亜論叢（東北亜歴史財団）、日本歴史研究（日本史学会）、日本研究（中央大学日本研究所）

3. 最近の学会の学術活動

◆韓日関係史学会主催の学術大会

－日 時：2006年11月10日

－テーマ：東アジアの領土と民族問題

韓・日・中の三国間に起きている領土と民族、そして歴史上における主権の範囲及び解釈問題をめぐって、様々な意見交換が行われた。

◆日本史学会主催の国際学術大会

－日 時：2006年12月6日

－テーマ：戦争と植民地主義

日本と中国からみた戦争と植民地主義及び韓国からみた戦争と植民地主義について意見交換が行われた。

◆韓日関係史学会主催の国際学術会議

－日 時：2007年12月7日

－テーマ：戦争と記憶の表象としての韓日関係

両国間において古代から近代まで相互対立と葛藤をもたらした戦争は、人々に憎悪と不信の記憶として残る。このような記憶の表象を学問的な観点から問題の本質に迫ることを試みた。

◆東国大学東アジア文化研究所主催の国際学術大会

－日 時：2008年2月13日

－テーマ：古代東アジア世界の物流と木簡

最近韓国の咸安（ハマン）地域の城山（ソンサン）山城周辺では、多量の木簡が出土されている。咸安城山山城の木簡と中国の走馬樓吳簡及び日本の荷札に関する最新の研究成果を通じて古代の物流世界を探っていく。

4. 日本前近代史における回顧と展望

(2002年～2005年)¹

◆日本史研究における主な特徴

- 2002年～2003年：単行本4冊、論文40本
- 2004年～2005年：単行本5冊、論文146本

- (1) 全体的に韓日関係史関連の研究が多数を占めている。これは第1期の韓日歴史共同研究委員会の成果によるところが大きいと言えるだろう。
 - * 韓日関係史研究論文編纂委員会『韓日関係史研究論集』1-10, 景仁文化社, 2005
 - * 韓日歴史共同研究委員会『韓日歴史共同研究報告書』1-6, 2005
- (2) 基本史料を集大成した韓日関係史料書が出版された。
 - * 孫承詒『韓日関係史料集成』全32巻, 景仁文化社, 2005 (韓国の史料から日本関連史料を整理したもの)
 - * 金起燮他, 『日本古中世文献の中の韓日関係史料集成』, 慧眼, 2005 (日本の史料から韓国関連の

史料を編年式に整理したもの)

- (3) 日本歴史教科書の歪曲に関連する分析と展望が体系的に研究されている。日本史を専門とする研究者が日本の中学校歴史教科書についての歴史記述と歴史認識の問題について時代別に分析を行った。
 - * 許東賢『日本中学校歴史教科書問題の背景と特質』, 延敏洙『日本中学校歴史教科書古代史記述と歴史認識』, 朴ス Chol『日本中学校歴史教科書中, 近世史記述と歴史認識』, 韓哲昊『日本中学校歴史教科書の韓国近代史の記述と歴史認識』など (以上は『韓国史研究』129, (2005) に収録)
- (4) 韓国古代史学会が〈古代韓日関係史の新しい照明〉という比較史的な視点から古代韓日関係史についての全体的な眺望を試みた。
 - * 韓国古代史学会編『韓国古代史研究』27, 2002 (任那問題、考古資料からみた古代韓半島と日本列島の相互作用、古代の仏教交流、『日本書紀』の研究史、古代韓日の美術交渉史など、様々な視点から整理している)

◆古代史

- 例年のように対外関係史に集中しているが、百済と倭、伽耶と倭、新羅と倭、高句麗と倭など、三国と倭の関係をそれぞれ区分して多角的にアプローチして韓半島と倭の関係を新しく位置づけしようとする研究が目立つ
- 研究主題が多様化しつつある
- 7、8世紀以降の対外関係についての新しい視点

研究者名	題名	雑誌・著書名及び発行年度	内容
金鉉球ほか	『日本書紀における韓国関連記事についての研究』1, 2, 3,	2002～2004	この研究は日本古代史と韓国古代史及び考古学の三つの分野の学際間の共同研究であり、『日本書紀』の中からみられる韓国関連の史料について史料批判を行ったもの
張八絃	「隅田八幡宮鏡の銘文についての新しい考察」	『百済研究』35, 2002	銅鏡の事例分析を通じて銅鏡は政治、外交的な意味合いをもつとともに、その銘文は6世紀の百済の斯麻王と日本の男弟王（継体天皇）と緊密に協力していたことを証明するという
朴昔順	「日本古代国家における天皇の外交機能」	『日本歴史研究』16, 2002	天皇の外交機能と関連する『令集解』の法解釈および式文と実例を通じて天皇の外交機能を明らかにしている
	「告知札と勝示からみた古代日本の文書行政と民」	『東方学誌』126, 2004	告示札と勝示を通じて文書行政と百姓との接点を分析したもの。8世紀後半こそ国家が百姓を文書行政の直接的な対象として注目し始めたという論究
金恩淑	「日本律令国家における官人給与」	『講座韓国古代史』3, 2003	律令国家の官人給与問題を大宝令と養老令を中心に検討している

研究者名	題名	雑誌・著書名 及び発行年度	内 容
李在碩	「5世紀の百済と倭国」	『百済研究』39, 2004	
	「日本古代群臣層と王位継承」	『史叢』 55, 2002	日本古代の王位継承の過程に群臣層が決定権者のような役割をしていたという吉村説に批判を加えて、群臣主導型(4, 5C中葉) - 「皇子+群臣」主導型(5C中葉以降) - 大臣主導型(6C末~7C中葉) - 王室主導型(7C中葉以降)のような変遷過程をたどっていくという
延敏洙	「古代日本の伽耶観の形成と変容」	『日本歴史研究』 20, 2004	鉄の産地であり、交易の中心地であった伽耶地域に対する古代日本の内官家という思想が、過去天皇の支配地という政治思想に変質していったと主張
金善民	「6世紀後半における倭と高句麗の認識」	『日本歴史研究』 22, 2005	伽耶の滅亡が東アジア世界再編の引き金になり、倭が高句麗との通交に積極的になった理由として、伽耶の滅亡により大陸の先進文物を円滑に輸入するのに支障が発生したからであると述べている
宋浣範	「日本律令国家における改賜姓の政策について」	『日本歴史研究』 22, 2005	渡来系の中で、高句麗系と百済系の改賜姓についての比較研究
李炳魯	「遣唐使と東北亜交流」	『日本学報』 55 - 2, 2003	円仁の『入唐求法巡礼行記』からみられる人的交流に焦点をあてて、唐と日本人々が互いにどう認識していたのかについて分析したもの
権憲永	「9世紀に日本を往来した二重国籍の新羅人」	『韓国史研究』 120, 2003	9世紀において海上貿易に携わった二重国籍の新羅人の活動に注目。この新羅人が9世紀の日本文献の中で唐と新羅の二重国籍として把握されたのは、日本支配層の蕃国観念からでたものであると主張
金厚蓮	「日本英雄神話の構造と論理」	『歴史文化研究』22, 2005	
同上	「古代日本の熊野信仰」	『日本研究』 24, 2005	熊野信仰を在来の神話と道教、儒教、修験道の融合からでたものであると言う
朴奎泰	「伊勢神宮と式年遷宮」	『日本学報』 59, 2004	伊勢神宮と関連している神話や歴史の検討を通じて式年遷宮の宗教史的な意味を把握している
李啓煌	「日本古代国家儀礼研究序説 - 即位儀礼と大嘗祭を中心に -」	『日本歴史研究』 19, 2004	律令制の施行とともに即位儀礼と大嘗祭が天皇制思想を在地に浸透させる天皇宗教支配の再生産だったと分析した論文

◆中世史

一他の時代より研究者が少ないことによって、研究成果が一番乏しい。

一最近の研究動向は主題が多様化している。韓日関係史に集中していた研究から、当時の日本の内部事情に目を向けた研究へと変わりつつある。

研究者名	題名	雑誌・著書名 及び発行年度	内 容
南基鶴	「10～13世紀における東アジアと高麗、日本」	『翰林大学人文科学研究所』 2002	10世紀から13世紀における高麗と日本の交流と相手に対する認識についての研究
	「中世日本の外交と戦争 - 蒙古の日本侵略を手がかりとして -」	『東洋史学研究』 80, 2002	蒙古の侵略をきっかけにして日本の武威に対する自覚が高揚し、日本人の自己認識が形成される結果となった。これが神国思想の自己優越意識、韓半島に対する蔑視と結合し、異国征伐のような侵略主義が誕生したという
南基鶴	「網野善彦の日本論についての再検討 - 中世史の観点から -」	『日本歴史研究』 19, 2004	いわゆる網野史観についての分析と問題点を提示。網野による二分法的な考えは複雑な歴史像を単純化する盲点があるという

研究者名	題 名	雑誌・著書名 及び発行年度	内 容
金普漢	「観応擾乱期における足利直冬の権力の性格－九州発給文書を中心に－」	『東洋学』 34, 2003	足利直冬の九州掌握の失敗の原因と今川了俊の成功要因と過程についての研究
	「東アジア経済圏域における略奪の主役、海賊と倭寇」	『中国史研究』 29, 2004	13世紀の承久の乱を契機に海上武士団の活動が本格的に高麗に侵入する倭寇へと転換したのであり、これらの活動が東アジア海域の中で、略奪と交易を生み出したという見解
李 領	「鴻山・鎮浦・荒山合戦における大勝の歴史、地理的考察」	『日本歴史研究』 15, 2002	倭寇との合戦で大勝と知られる鴻山・荒山戦闘について、文献史料だけではなく現場調査などを通じて倭寇の実態を立体的に究明した論究
	「高麗末における倭寇と馬山」	『韓国中世史研究』 17, 2004	馬山地域を中心に活動した倭寇とその実態を分析したもの
申宗大	「侍所からみた鎌倉幕府の政治様相」	『日本語文学』 23, 2003	侍所を通じて幕府の政治変化と様相を考察
	「鎌倉幕府の側近政治についての研究」	『日本語文学』 30, 2005	源頼朝執権期における政治の特徴は、制度やシステムより側近などの人間関係を中心に行われたという
金 永	「中世の氏寺についての研究」	『日本研究』 24, 2005	日本中世の氏寺と高麗の願堂の経済、血縁及び精神的な機能の比較を通じて共通点と違いを分析したもの
	「日本中世の女性と性」	『日本学研究』 14, 2004	家父長的な性格をもつ家の成立に焦点をあてて、日本中世における女性の性と家の関係を分析したもの
金サンギョ 山口承弘	「中世日本社会における高麗との関係」	『日本語文学』 26, 2004	高麗前期における仏教を軸にする日宋関係と九州の島嶼地域に行われた私的貿易を通じて中世の対外関係と外交姿勢を分析したもの
須田牧子	「15世紀における日本と朝鮮の仏具輸入の意義」	『韓日関係史研究』 20, 2004	日本が朝鮮から輸入した大蔵経の具体的な使用事例を分析したもの

◆近世史

- － 全体的な特徴として対外関係の論文が主流を占めており、特に、文禄・慶長の乱、倭館、朝鮮通信使などをテーマにしている論究が多い
- － 研究主題の多様化

研究者名	題 名	雑誌・著書名 及び発行年度	内 容
関德基	「文禄の役によって拉致された朝鮮人の帰還と残留への道」	『韓日関係史研究』 20, 2004	帰還した朝鮮人と残留した朝鮮人の生活実態について綿密に検討したもの
尹裕淑	「16世紀後半における日本の対外政策と対外認識－秀吉の大陸征服の計画を中心に－」	『文化史学』 23, 2005	秀吉の大陸征服の論理について、全国統一の顕示と天命論理による天下および異域の統一思想、16世紀後半の日本社会の対外に対する優越意識などをあげている
金文字	「文禄の役の日・明講和交渉の破綻についての一考察－松雲大師と加藤清正との会談を中心に－」	『精神文化研究』 28 - 3, 2005	日・明講和交渉が破綻になった原因として西生浦会談の意義を大いに評価している

研究者名	題名	雑誌・著書名 及び発行年度	内 容
鄭章植	「1607年の回答兼刷還使の刷還と敵情探偵」	『日本学報』 55 - 2, 2002	はたして回答兼刷還使が日本の国政探索に積極的であり、日本を正確な観点で見ようとしたのかについて疑問を提示している
	「1624年の明清交替期における日本使行」	『日本学報』 56 - 2, 2003	明と清の交替を期にして、日本との外交が交隣に変わることができたので、1624年に行われた使行こそ、通信使外交へと変わる転換点になったと指摘している
金仙熙	「17世紀初期から中期における林羅山の他者像－朝鮮通信使との筆談を中心に－」	『韓日関係史研究』 16, 2002	朝鮮通信使と林羅山を中心に両国の知識人の相互認識を考察したもの
韓文鍾	「朝鮮前期の日本国王使の朝鮮通交」	『韓日関係史研究』 21, 2004	偽使の主体として対馬、九州の地方豪族、博多の商人などをあげており、三浦の乱以後、偽書事件に強硬に対処しなかったのが国書改作に繋がったと主張
孫承喆	「朝鮮通信使と21世紀の韓日関係」『回顧してみる韓日関係史』2005		
岩方久彦	「1811年における易地通信研究」	『韓日関係史研究』 23, 2005	1811年の対馬における易地通信は両国の相互の意見が十分に反映された新しい儀礼であり、当時の状況に適合して行われたと分析している
金東哲	「倭館図を描いた下璞の対日交流活動と作品」	『韓日関係史研究』 19, 2003	画家の下璞を通して倭館の対日交流活動の歴史を探った論究
李薫	「1836年における南 中の乱入事件の扱いと近世倭館」	『韓日関係史研究』 21, 2004	南 中の倭館乱入事件を通じて倭館に対する朝鮮人の認識と倭館統制政策などを分析したもの
鄭ソル	「朝鮮の銅銭と日本の銀貨－貨幣の流通からみた15～17世紀の韓日関係」	『韓日関係史研究』 20, 2004	15～17世紀の朝鮮と日本の銅銭と銀の輸入及び輸出の変化過程から韓日関係を再検討したもの
尹炳男	「近世日本の天皇と西洋－西洋人の天皇観－」	『日本歴史研究』 16, 2002	日本が西洋人と接触するごろの16世紀から明治維新までを三つの時期に分けて、各時期における西洋人による天皇についての認識及び天皇に対する理解がどのように関連しているのかについて分析した研究
朴薫	「徳川末期における後期水戸学の民衆観」	『歴史教育』 85, 2003	江戸末期の水戸学を中心に成立する近代日本の民族主義の成立過程を論じたもの
具テフ	「士と農工商の間の人間関係」	『日本学報』 61 - 2, 2004	朝鮮後期中人と江戸時代の帯刀人とを比較して、それぞれの存在形態と社会的な地位を分析した論究
朴花珍	「日本のキリシタン時代における九州地域についての研究」	『歴史と境界』 54, 2005	九州地域のキリシタン教の研究動向と朝鮮人捕虜の改宗及び殉教者、キリシタン大名、島原の乱にいたるキリシタン教の社会的な動向についての論究
朴晋漢	「近世中後期の上方懲役の儉約村掟に関する研究」	『東洋史学研究』 89, 2004	商品経済の進展に伴う農村社会の流動化と階層化を儉約村掟と関連付けて説明している
李啓煌	「日本近世の初、中期における出版業と出版統制令」	『東アジアの伝統社会の媒体と知識情報』2005	江戸時代の出版業と朝鮮からの活字印刷術、本屋の出現及び書店組合について分析したもの

5. 総括

韓国における日本史関連の研究動向の概括と今後の課題とすべき点について、いくつか指摘しておく。

1. 全体的な特徴として、日本史専門の研究者及び日本史まで研究の領域を広げている研究者が増加していることと、それに伴う研究主題が拡大していくことがあげられる。この中で、中世史関連の論究が大幅に増加している。
2. 論文のテーマとしては韓日関係史の論究が主流ではあるが、少しずつ日本史の本質に関わる研究主題が増えていると言えるだろう。
3. 日本史関連の論文が増加していることは、望ましいことではあるが、量的な変化に伴って、論文の質を高める方向で研鑽を継続していくことを研究者のすべてが共有し克服すべき課題である。勿論、既存の史料をつかって新しい解釈を加えることも重要ではあるが、積極的に多様な日本の1次史料に当たって論文の内容を深めていくべきである。
4. 日本史が一つの領域としてすでに定着している中で、翻訳書、概説書などよりは研究者の斬新な視点から書いた本格的な研究書が必要とされる。
5. 持続的な情報交換と日本の研究者とのフィードバックが大事である。たとえば、一回性の国際学術大会よりは、韓日の研究者同士の共同研究にも目を向けて多角的にアプローチしていくことが重要であると思う。

注

1. 『歴史学報』所収（183, 191輯）の「韓国歴史学界の回顧と展望」に基づき、作成したものである。

じょん・じな／韓日歴史共同研究委員会・専門委員